

## 東部地域の歴史と文化

### (1) 紫波の文化基層と東部地区

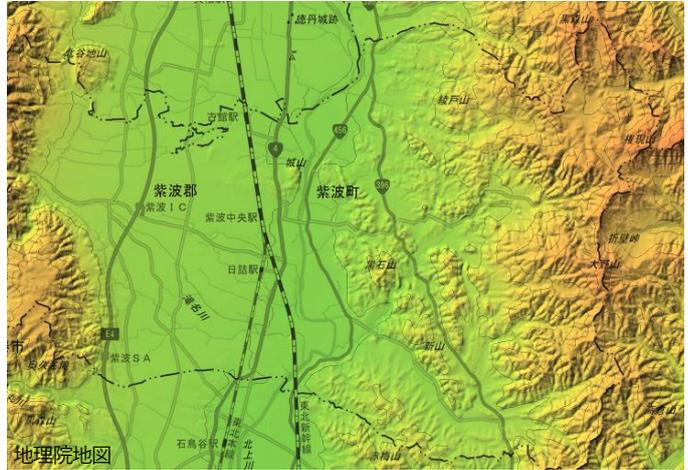
**東部地域とは** 紫波町は、東部に北上高地、西部に奥羽山脈が南北に縦走し、その中央部を北上川が貫流する。面積は 239.03km<sup>2</sup>、東西に 27.9km、南北に 12.9km の広がりを持ち、町域の 57.8% を森林が占める。

町域は、北上川西岸に位置する中央部・西部、北上川東岸に位置する東部の 3 地域に大別される。

町域の西部には、奥羽山脈のすそ野に扇状地・台地（段化扇状地）が広がり、扇状地の張り出しに押された北上川低地部分に中央部が位置する。

東部には中起伏状の北上高地が広がるが、扇状地などの山麓堆積地形はほとんどみられず、小起伏山地、丘陵地、台地、平坦面などが複雑に入り組み、その大部分は石灰質岩石である。北上高地から西に流れる赤沢川、彦部川、天王川などが北上川に合流する。

紫波町の東部地域とは、北上川東岸に位置する 4 地区（彦部・佐比内・赤沢・長岡）の行政区の汎称である。東部平坦地域（彦部・長岡地区の一部）、東部準平坦地域（佐比内・赤沢・長岡地区の一部）に区分されることもある。



北上盆地に位置する紫波町

**見直される縄文・弥生文化** 昭和初期に、「郷土愛を涵養する<sup>かんよう</sup>」ことを目的に、全国で「郷土教育資料」が編纂された。旧村単位で作成された東部 4 地区（彦部・佐比内・赤沢・長岡）の「郷土教育資料」によれば、各地区の歴史は、総じて平安時代初頭の坂上田村麻呂の東北開発（征夷）事業から始まる。また、田村麻呂が関与したとする多くの社寺の由来や縁起を伝えるが、縄文時代や弥生時代はその枠外にあった。

遣唐使が派遣された 7 世紀、東北地方に住む蝦夷<sup>えみし</sup>の国について、『日本書紀』は「五穀はなく、肉を食べて生活し、家はなく深山のなか、樹の根本にとどまり住んでいる」と記録している。これより前の縄文文化については、「先住民族である未開の人々の異文化」であり、考古学の世界でも長らく軽視されてきた実態があった。さらに、「かつて古代東北地方には、稲作文化（弥生文化）は存在しない」とまで言われてきた。

昭和 50 年代に、青森県南津軽郡田舎館村<sup>いなかだて たれやなぎ</sup>の垂柳遺跡から弥生時代の水田跡が見つかり、昭和 60 年代には、弘前市の砂沢遺跡から灌漑水路と畦畔を伴う水田跡が見つかった。奥州市では、常盤広町遺跡（水沢区）や反町遺跡（江刺区）から水田跡と考えられる遺構が検出されている。これらの発見で、北九州に成立した稲作農耕技術は、きわめて速いテンポで本州の北端まで伝播<sup>でんぱ</sup>していたことが証明された。

稲作農耕が北東北地方でどの程度の規模で行われたのかは明らかになっていないが、近年の考古学研究の成果から、この地方の縄文・弥生時代の社会観を見直す動きが活発化している。

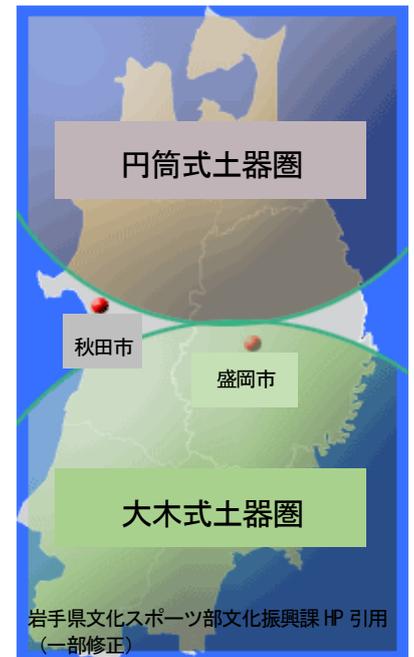
御所野遺跡（一戸町）を含む北海道・北東北の縄文遺跡群は、狩猟・採集・漁労を生業の基盤に置き、自然と人間が共生する定住生活は、顕著な普遍的価値をもつ文化として世界遺産登録をめざしている。

北東北地方では、落葉広葉樹が広がる自然環境に積極的に関与し、「縄文里山」と称される人為的な生態系を成立させ、稲作に頼らない生業を維持していたと考えられている。この稲作文化に先立つ縄文文化は、優れた技術や豊かな精神世界をもち、狩猟採集文化が極限まで発達した成熟した社会と評価され、日本の基層文化とする考え方が考古学研究によって示されている。

**様々な縄文文化** 日本列島で展開された縄文文化は均質ではなく、縄文時代前・中期の東北地方は、津軽海峡を渡って東北地方北部に南下してきた「円筒式土器圏」と、東北地方南部を中心とする「大木式土器圏」に二分されていた。その境界は、ほぼ盛岡市と秋田市を結ぶラインである。

西田遺跡（紫波町犬渕）は、渦巻文様が特徴的な大木式土器文化を主体にしているが、近々の大明神遺跡（紫波町片寄）では、大木式土器だけではなく、円筒式土器も受け入れていたことが確認されており、紫波町域は二つの土器文化圏が触れ合う地域であったと考えられている。

西田遺跡は、集落の中心に共同墓地が配置され、これを取り囲むように竪穴住居群が環状に分布する縄文中期の遺跡である。この遺跡は、定型的な集落構成から「縄文モデル村」と評価され、縄文集落の変遷を考える上で最も好適な事例として、多くの学術書や論文などに取り上げられている全国的に著名な遺跡である。なぜか地元ではあまり知られていない。



二つの土器文化圏

**目に見えない歴史文化** 東北地方が近畿地方を中心とする西日本と異なる地域と意識されるのは、古墳時代以降である。東北地方は、西の農耕社会と北の狩猟・採集社会の境界領域であった。同じ東北地方でも東南部と東北部は社会経済的に別な歩み方をする。東北地方南部は 3 世紀後半に古墳時代へと社会を転換させていくが、東北地方北部では、稲作を基盤とする社会を構成しながらも、北海道地域で展開された狩猟採集を生業とする「続縄文文化」に比重を置いた社会を構築していった。この「続縄文文化」に比重を置く社会は、農耕社会を基盤とする西日本から見た場合、かなり異質な社会と意識されていた。

縄文社会は、農業生産力の増大や、それを維持するための共同体の組織化などの志向はなく、縄文土器にみられる豊かな精神性、つまり「物質的に豊かな社会」ではなく、自然と共生するための「儀礼や祭祀」などの「精神的な豊かさ」を求めていたと考えられている。人が自然と共生する縄文時代は、1 万年も続いたことから、縄文社会の精神性は北東北地方に暮らす人々の文化の基層になっていることは確かといえる。

紫波町域では、その後、農耕社会へ移行する弥生文化、律令国家の影響を受けた古墳時代や征夷時代を迎える。さらに、平泉文化の影響を受けた樋爪氏や、足利氏・盛岡南部氏・遠野南部氏・八戸南部氏など武士による統治時代が長く続いた。紫波町の東部地域は、中世において河村氏や高水寺斯波氏によって統治され、近世に至って、佐比内地

区の一部は大迫代官所・佐比内代官所（遠野南部氏）の管轄に組み込まれ、東部地域の北沢村・栃内村・江柄村・紫野村は、上田通代官所の管轄下にあった。

各地域には為政者の考え方や外来文化の影響をうけつつも、人々の生活、暮らしの中で創出、継承されてきたモノの見方や考え方、地域の慣習や生活様式など、地域内でお互いに共有される文化がある。これらは地域特有の個性であり、魅力でもある。この形として残せない個性や魅力も目に見えない歴史文化である。

## (2) 東部地区の歴史（奈良時代～平安時代初期）

**史書に登場する「志波」** 大化の改新（645）以後、天皇を中心とする中央集権国家の建設が始まる。古代の東北地方は、畿内を起点とする海道（東海道）と山道（東山道）の奥に位置することから「道の奥」・「みちのく」と呼ばれていた。当時の律令政府は、岩手県域を「胆沢の地は賊奴の奥区なり。…子波・和我は僻して深奥にあり…」（『続日本紀』延暦8年6月9日条）と認識しており、北東北地方は国家の領域に含まれていなかった。古墳時代に入っても、稲作農耕を受容しつつも、「続縄文文化」の影響を受けていた。

古墳時代（3世紀中頃から7世紀頃）、岩手県域に埴輪を備えた本州最北の前方後円墳である角塚古墳（奥州市胆沢区）が築かれた。北東北地方の古墳は角塚古墳を除いてすべて末期古墳に属するもので、北東北地方は後期古墳文化が定着しなかった地域といわれている。この地域は、国造が置かれなかった地域とほぼ一致している。のちに律令政府から「国家支配の及ばない地域」・「エミシが住む未開の辺境地域」として見られ、7世紀の後半以降、律令政府は城柵を拠点に征夷政策をすすめていった。

当時の紫波（以後、「志波」と表記）は、「子波」・「斯波」・「志波」などと記録され、岩手県域では早い時期に「胆沢」とともに、国家が編纂した歴史書（六国史など）に登場する地域である。胆沢城跡からは、「斯波」と書かれた墨書土器が出土している。『続日本紀』には、「志波村ノ賊叛逆…」（宝亀7年<776>）したことが記録されている。これは「志波」地方の地名が出てくる最初の記録である。出羽国政府軍と戦闘し、政府軍が敗れるとの記述から、当時の志波地方には強大なエミシ勢力が存在していたと考えられる。ところが、延暦11年（792）に志波村のエミシ首長が朝廷への帰属を願い出るとの記述もある。志波村のエミシは、その勢力を温存したまま、志波城の造営を受け入れたのだろうか。

**東北開拓と坂上田村麻呂** 国家の支配が及んでいない北東北地方を勢力下に治めるため、律令政府は北上川流域に城柵を造営しながらその勢力を北上させていった。延暦21年（802）に胆沢城（奥州市水沢区）が築かれ、翌年に志波城（盛岡市）が築かれ、雫石川以南まで律令国家の版図に組み入れられた。弘仁2年（811）、和賀・稗貫・斯波（志波）郡が置かれた。志波城は多賀城（宮城県）に匹敵する陸奥国では最大・最北の城柵で、東北開拓の前線基地になった。外郭は築地塀で囲まれ、その内側には兵士の家や工房らしき多くの竪穴建物跡が発見されている。志波城は洪水を理由に廃止となり、弘仁3年（812）頃、大幅に規模を縮小した徳丹城（矢巾町）が造営された。

志波城や徳丹城の整備にともない、その周辺で須恵器の生産が本格的に始まった。岩手県域の須恵器窯跡は、志



上空からみた志波城跡

波城跡や胆沢城跡などの周辺に 10 か所ほど知られている。紫波町域では、星川窯跡（北田）、杉ノ上窯跡（二日町）が官衙などに須恵器を供給し、後に周辺集落へも供給していたと考えられている。

須恵器とは朝鮮半島から伝来した青灰色をした硬い土器で、専門職人がロクロで成形し、窯で焼成したものである。星川窯跡は、9 世紀後半の須恵器窯跡と考えられている。星川窯の周辺には徳丹城の官衙や豪族と関係する須恵器職人が住む集落があった可能性がある。星川窯の須恵器生産は、地元東部地域の生業や文化にどのような影響を与えただろうか。紫波町の産業史を解明するうえで注目されるべき遺跡である。

**坂上田村麻呂と寺社縁起** 東北地方には日本武尊・源頼義・源義家・源義経などに関わる多くの英雄伝説が存在する。紫波町東部には、坂上田村麻呂が関与したと伝わる観音像（堂）や寺社がなぜか多い。

田村麻呂の建立・再興を伝える東部地域の神社は、八坂神社（東長岡）、白山神社（赤沢）、熊野神社（佐比内）、愛宕神社（彦部）、館森神社（犬吠森）などが挙げられる。西部地域では、新山神社（土館）、水分神社（小屋敷）、白山神社（片寄）などがある。なぜか東部地区に偏っている。

田村麻呂伝説では観音信仰との結びつきも多い。田村麻呂の観音信仰を伝えている寺社は、千手堂千手観音（彦部）、山祇神社十一面観音（熊野山昭光寺・山屋）、岩谷聖観音（岩谷寺・佐比内）が知られる。

古い伝承をもつ観音霊場では、岩盤や岩穴の周辺に観音が鎮座したとする伝承が多い。古代からの自然崇拝である磐座・岩境信仰が観音信仰と結びついたのであろうか。

他方、源氏による創建・再興などの縁起・伝承をもつ神社は、志和稻荷神社（升沢）、志和八幡宮（上平沢）、蜂神社（宮手）など西部地域に多い。東部地域では青麻神社（遠山）が挙げられる程度である。

蝦夷が多く住む東北地方から見れば、田村麻呂は征服者である。征服者である田村麻呂がなぜ、これだけ伝説・伝承の対象になっているのだろうか。かつて蝦夷はアイヌ人と同一視されていた。田村麻呂はそのアイヌ人を追い払い、われわれの先祖を東北地方に導き入れ、安住の地を与えてくれた恩人として評価されているという考えがある。このような背景から、田村麻呂は英雄視され、神聖化されたのだろうか。

### (3) 東部地域の歴史（平安時代中期～後期）

**安倍氏の台頭と前九年合戦** 9 世紀中頃には徳丹城も廃止され、鎮守府胆沢城が唯一の律令政府の拠点となった。10 世紀になると、廃止となった志波城跡地の周辺に、志波城の政庁建物に匹敵する大規模な大型掘立柱建物が見られるようになる。これらの遺構は、城柵を拠点にした地方支配が崩れ、郡司（郡の長）による在地支配の秩序が変質していくことを示している。11 世紀には奥六郡（胆沢・和賀・江刺・稗貫・志波・岩手郡）から安倍氏、出羽山北三郡（仙北・平鹿・雄勝郡）から清原氏の二大豪族が台頭した。安倍氏は 11 世紀の初め頃には「六箇郡の司」という地位を律令政府から公認（黙認）され、奥六郡を事実上領地化していた。全盛期の

安倍頼良（後に頼時と改名）の時代に、本拠地である奥六郡の南方に進出したとして陸奥国司と対立した。前九年合戦



10 世紀の奥六郡



(1051～1062) と呼ばれるこの争いで、源頼義は出羽国の豪族清原氏の支援を受けて安倍氏を滅亡させた。

### 後三年合戦と平泉藤原氏 安倍頼良（頼時）の娘を妻としていた

藤原経清は、安倍氏に加担したことを理由に厨川柵で処刑された。合戦後、経清の妻は7歳になる清衡を連れて勝者である清原武貞と再婚する。おおよそ20年後、清原氏の内紛である後三年合戦（1083～87）がおこると、清衡は陸奥守として赴任した源義家の協力を得て勝利し、陸奥・出羽両国の覇権を握った。

後三年合戦後、安倍氏と清原氏の系譜を継ぐ清衡は、藤原姓を名乗り、陸奥国及び出羽国の押領使（反体制武装勢力を追捕する職）として奥六郡及び山北三郡を支配することとなる。その後、歴代の平泉藤原氏は押領使・鎮守府将軍（蝦夷を鎮めるために設置された職）・陸奥守に就任した。平泉藤原氏は、中央政権と一定の距離を保ちながら、奥羽地方に一大武家勢力を築きあげ、平泉に黄金文化を開花させた。

### 義経神社案内示板

平泉藤原氏の治世は、基衡、秀衡と約100年近く続いたが、四代泰衡の代に、兄源頼朝の追討を逃れ、平泉に身を寄せた源義経をかくまったとして、文治5年（1189）、頼朝に攻められ滅亡した（奥州合戦）。

平泉に深く関わった源義経は、『義経記』をはじめ広く中世小説・中世舞曲・能・浄瑠璃、さらには歌舞伎の世界にも題材として取り上げられている。東部地域は、義経伝説を今に伝える歴史の里といえる。

延久二年合戦と東部地域 前九年合戦と後三年合戦の間で、陸奥国を舞台にした戦役があるが、あまり知られていない。「延久二年合戦」あるいは「延久蝦夷合戦」ともいわれる。延久2年（1070）に陸奥守源頼俊が「閉伊七村三徒」・「衣曾別島荒夷」などを征討した戦いである。この合戦によって津軽半島と下北半島までの本州全土が国家の支配下に組み込まれた。「閉伊七村」は現在の岩手県閉伊地方と考えられている。

この合戦では、鎮守府将軍清原武則の孫真衡（藤原清衡の異母兄）らの軍勢が動員された。当時の志波郡は、安倍氏の支配基盤を継承した清原氏が統治していた。志波郡の東方は、北上高地を隔てて太平洋岸に通じている。東部地域はこの合戦の前線基地になった可能性が考えられる。

比爪館と樋爪氏 平泉藤原氏は、奥六郡の北半部に位置する志波郡に一族である樋爪氏を配置した。比爪館は『吾妻鏡』に登場する樋爪氏の政庁・居館である。館跡は、堀や大溝で全体が囲まれ、四面廂建物や総柱建物を備えている。その遺構や出土した土器類などから、序列的に平泉柳之御所に次ぐ規模の居館であったと考えられている。比爪館は、東部地域などで産出される砂金や北方交易の中継地としての管理・中枢機能を担いながら、平泉政権やその財政基盤を支えていたと考えられる。

『吾妻鏡』によれば、源頼朝は北方へ逃走した藤原泰衡を追放し逃走したが、後に厨川の陣営に投降した。

俊衡は比爪の領地を従来どおり保証されたが、残る一



族は流罪になった。逃走中の泰衡は郎従の河田次郎<sup>かわだのじろう</sup>に殺害され、その首級は陣岡（宮手）<sup>じんがおか</sup>に届けられた。

樋爪氏の歴史を受け継ぐ紫波町は、世界遺産「平泉」の都市理念が平泉以外で展開された数少ない地域である。平泉文化の影響をうけた関連遺産は、比爪館跡を中核に周縁の東部・西部地域にまで広がっている。

比爪館跡全景

**あづま街道と東部地区** 弥生・古墳文化の東進は、畿内を軸として、東日本に「山道」・「海道」の整備を促した。紫波町西部には、奥羽山脈の東麓を北上して蝦夷地に達する中世の幹線道路である「奥大道」<sup>おくだいどう</sup>が縦貫していた。一方、東部には、北上高地の西麓を南北に縦貫する古代・中世の古道である「あづま海道」が縦貫していた。中尊寺を建立した藤原清衡が、陸奥の砂金・馬・漆・鷲羽などを京に運んだ古道と伝えられている。この海道（街道）は、衣川・江刺を経て極楽寺跡（北上市）、成島<sup>なるしま</sup>（花巻市東和町）、五大堂（花巻市石鳥谷町）を経て、紫波町東部地域（蓮華寺廃寺まで）まで続いていたとされる。

「あづま海道」の名称は、安永 2 年（1773）の『安永風土記』で確認できるが、いくつか類似の呼称があり、その終点や道筋など不明な部分がある。「あづま海道」は、伝承などに基づく北上川東岸に位置する古道の総称として使われた可能性もある。この道沿いには、古代・中世の寺院跡や仏像・道標が残っている。

「あづま海道」が縦貫する紫波町東部地域には、平泉の財政を支えた金山地帯が広がる。砂金採取は、この地に暮らす人々の生業となり、山間の地に集落を生み、稲作に代わる産業として暮らしを支えてきた。

東部地域から採掘された砂金は、「あづま海道」や北上川をさかのぼり、中尊寺金色堂を彩り、多くの仏像を荘厳したと伝えられている。「あづま海道」や北上川は、東部地域の物資を平泉に運び、逆に中央から仏像・経文・調度のほか、宗教儀礼や生活様式などの文化を招来させた。「あづま海道」は、生活の道、宗教の道、流通の道として機能し、平安仏・板碑・寺社（跡）・民俗芸能などの豊かな文化を集積させた。

現在、東部地域は 4 つの地区に行政的に区割りされている。「あづま海道」という基幹道路に沿って生まれ、育まれた文化は、「あづま街道文化圏」と呼ぶにふさわしい一つの地域文化圏を生み出している。この文化圏から生まれた衣食住・生業・信仰・年中行事等に関する風俗慣習・民俗芸能などを改めて見直すことによって、東部地域の歴史・風土にいっそう親しみもち、魅力を感じることができる。

**北上川東部の仏教遺産** 岩手県域では、北上川流域に古代の寺院やその遺跡が集中している。これらの寺院（跡）は、胆沢城（奥州市）や志波城（盛岡市）の整備を契機に、国家鎮護・蝦夷の鎮撫や教化・古墳造成に代わるものとして建立され、仏教は寺院や城柵での法会をとおして普及し、特徴ある仏像が祀られた。

胆沢城跡の近くにある黒石寺（奥州市）は、天台寺（二戸市）と同様、行基の開基伝説をもつ古刹である。本尊の薬師如来坐像（国重要文化財）は貞観 4 年（862）の胎内銘<sup>たないめい</sup>をもち、年号をもつ木彫仏としては我が国最古の仏像として著名である。銘文中に関東からの移配民とみられる人物の名が見られることから、胆沢城と密接な関係が想定されている。

くにみさん  
国見山廃寺跡（北上市稲瀬町）は、北上高地西側の国見山南麓に位置し、平安時代中期の東北地方北部では最大規模を誇った山岳寺院である。その最盛期は、11世紀後半の清原氏の時代と推測されている。平泉が繁栄を迎える200年以前に、北上盆地の一大仏教聖地として栄えていた。

なるしま びしゃもんどう とぼつ びしゃもんてんりゅうぞう  
奥州市藤里、北上市立花、花巻市成島の毘沙門堂の兜跋毘沙門天立像は、いずれも東北地方を代表する毘沙門天立像であり、国の重要文化財に指定されている。毘沙門天立像がたどった道程は、「毘沙門天街道」と呼ばれる。平安初期に坂上田村麻呂が北進した足跡でもあり、これらも北上川東岸に集中する。この「毘沙門天街道」を北上川沿いに北上すれば、しょうおんじ（紫波町遠山）の毘沙門天像に行き着く。

**平安時代の仏教** 平安時代は、従来の国家的な仏教とは異なる新しい仏教が志向され、天台宗・真言宗が興り、密教が盛んになったという特徴をもつ。二つの宗派は、ともに密教として国家・社会の安泰を願う加持祈禱を行い、修行することによって悟りを開き、人が生きてまゝ仏になるという即身成仏や現世利益を説いた。さらに仏（僧）に対して喜捨を行えば悟りへの縁を結ぶことができると主唱し、撰閑家藤原氏をはじめとする多くの貴族層の帰依を受け、造寺・造仏や荘園の寄進がさかに行われた。平泉も例外ではない。

奈良時代には、神は迷える存在であり仏の救済を必要とするとの考えや、神は仏教を守る護法神であるとする考え、神は仏が衆生救済のために姿を変えて現れたとする考え（本地垂迹思想）など、神仏習合の思想がみられた。神仏習合とは、日本古来の土着の神祇（天神地祇の略で、天上から降った神と地上に天降った神の子孫）信仰と外来の仏教信仰が混淆・融合し、一つの信仰体系として再構成（習合）された状態をいう。たとえば天照大神の本地を大日如来として、この如来が日本に渡ってきて仮に天照大神に姿を変えたとする考え方である。寺院境内に守護神が鎮守として祀られ、神社に神宮寺が建てられ、寺院で神前読経などが行われた。今でも、同じ屋根の下に仏壇と神棚が共存するのは、神仏習合の名残である。

なんと がらん  
天台宗・真言宗では、南都仏教（奈良時代の仏教）と違って、山岳に伽藍を営み、山中を修行場としていたことから、その神秘的な教義が霊山を神聖視する在来の山岳信仰（神社）と結びついて修験道の源流となった。修験道は、古来の山岳信仰が外来の仏教（密教）や陰陽道、道教、儒教などの影響を受けながら霊山を修行の場とし、深山幽谷に分け入り厳しい山岳修行によって霊力や呪力を身につけるという実践的な信仰である。修験道は、在来の山岳信仰の対象であった熊野三山、加賀白山、伊豆走湯山、出羽羽黒山などを修行の場とし、全国に教線を拡大した。その影響は志波地方にも及び、社寺建立に大きな影響を与えた。

平安時代中期以降、神仏習合の考え方は全国に浸透し、各地の霊山信仰を包摂しながら拠点寺院が山岳霊場を中心に創建され、白山・熊野・薬師・観音などの諸神・諸仏が神仏習合を背景に祀られていった。このような山岳寺院は、天台・真言宗の影響下に置かれ、山岳修行を特徴とする修験を組織の中に取り込みながら在地社会に定着していった。古い縁起をもつ神社は、この流れのなかに位置付けることができる。

**平安仏の里** 平泉藤原氏は、当時の日本海や太平洋の交易ルートを利用し、熊野三山・白山・出羽三山などから多くの修験者や神人を招き、仏国土の建設を推進した。その影響は比爪地方にも及んだと考えられるが、文献で確認できる樋爪氏時代の寺社は、こうすいじ せうとう はち  
高水寺・走湯権現社・蜂神社だけである。

産金地である紫波町東部地域には、平泉藤原氏時代に砂金を求めて技術者を含む多くの金山関係者が来住し、中山間集落の形成を促した。赤沢白山神社や蓮華寺（廃寺）は、産金鎮護、鉱山儀礼、金山従事者の信仰の場としての機能も果たしていたと考えられる。白山神社あるいは蓮華寺に祀ったとされる毘沙門天像と五大明王像が近くの正音寺に安置されている。また、七仏薬師像は赤沢薬師堂に安置されている。いずれも平泉藤原氏・樋爪氏の時代に重なる平安仏である。

白山神社あるいは蓮華寺に多くの仏像・神像が祀られていたと推測されるが、これらの平安仏はその一部と考えられる。近世以前に蓮華寺は廃寺となり、毘沙門天像と五大明王像は赤沢薬師堂に引き取られ、明治維新を迎えた。毘沙門天像と五大明王像は、廃仏毀釈の影響から仏の垂迹とされ、七仏薬師像と同居することが許されず、行き場を失って赤沢薬師堂の本寺である正音寺に移されたという経緯がある。

北上川中流域は、県内では平安仏が集積する地域である。上流域にも平安仏が鎮座するが、赤沢地区の平安仏は平良泉藤原氏との関係を抜きに考えられない数少ない仏像である。この地域が奥六郡の北半にありながら仏教文化が早くに開花し、定着した先進地域であったことを示している。

#### (4) 東部地域の歴史（鎌倉時代～安土桃山時代）

**鎌倉時代の志波郡** 奥州合戦に勝利した源頼朝は、文治5年(1189)、功績があった家臣を郡・郷・荘園などの地頭職に任命して奥羽を鎌倉幕府の直轄支配下に置いた。志波郡では、系図によれば河村秀清が志波郡の北上川東岸に領地を与えられ、大巻（紫波町彦部）に城館を整備したと伝える。『吾妻鏡』には記録されていないが、志波郡北上川西岸は足利義兼（頼朝の従兄弟）に給与されたと考えられており、南北朝期に高水寺城（二日町）を本拠にした。



大巻館跡全景

志波郡周辺で地頭となった御家人は、岩手郡の工藤氏、稗貫郡の稗貫氏、和賀郡の和賀氏、遠野保の阿曾沼氏、閉伊郡の閉伊氏などが『吾妻鏡』や系図などから確認できる。

**南北朝・室町時代の紫波町東部** 鎌倉幕府の滅亡後、後醍醐天皇（南朝方）は建武の新政権を樹立し、天皇による政治を復権しようとした。天皇は北東北の支配を重視するため、北畠親房の嫡子頭家を陸奥守に任命して、南部師行（八戸根城南朝氏）・伊達行朝・結城宗広などの武將を随えて陸奥国府（宮城県多賀城市）に赴任させた。北朝方の足利尊氏は、北畠頭家に対抗できる権威として、足利一門で最高の家格を誇り、志波郡に領地をもつ斯波氏に着目し、足利高経の子・家長を奥州総大将に任じて南朝勢力と対抗させた。

南北朝時代、北上川東岸を勢力基盤にした河村氏は、根城南朝氏・滴石氏などと共に南朝方に与し、北朝方の足利勢と攻防戦を頻繁に繰り返した。しかし、南北朝時代末期には南朝方の衰退とともに河村宗家は没落し、その支族の多くは高水寺斯波氏の家臣に組み入れられた。河村氏の一族は、大萱生・栃内・江柄・手代森・大巻・玉山・日戸・下田・渋民・川口・沼宮内等の諸氏が知られるが、河村宗家の衰退とともに高水寺斯波氏、南部氏の在地領主層としてそれぞれのを安堵され、命脈を保った。

志波郡東部の河村一族を併合した高水寺斯波氏は、足利一族として 250 年以上の長期にわたり、高水寺城を本拠に源氏ゆかりの地である志波地方を統治した。斯波氏は清和源氏足利氏の一族で、足利泰氏（奥州合戦に参戦した義兼の孫）の長男家氏を祖とし、幕府の三管領（細川氏・畠山氏・斯波氏）の筆頭となった有力守護大名である。奥州に土着した一族は奥州斯波氏と呼ばれ、高水寺城を本拠とした斯波氏は高水寺斯波氏と呼ばれた。斯波氏発祥の地である志波郡を治めていたことから名族とされ、奥州探題職を世襲した同族の大崎斯波氏と並び称される存在であった。

**東部地区の中世城館** 鎌倉幕府の滅亡から南北朝時代の内乱期には、河川近くの丘陵などの要害の地に多くの城館が築かれた。今日残る中世城館跡の多くは、南北朝時代以後のものである。

『岩手県中世城館跡分布調査報告書』（岩手県教育委員会）によれば、紫波郡（旧都南村を含む）では 72 の城館が確認されている。紫波町は 51 館を数え、約 7 割を占める。地域別では、西部 17 館、中央部 25 館、東部 9 館である。紫波町域では、県内最大規模の高水寺城を除き、中・低位段丘に位置する比較的小規模な居館が多い。北上川東部に位置する長岡館跡、大巻館跡、佐比内館跡などはやや規模が大きい城館である。これらの城館は、空堀と土塁に囲まれた複数の廓によって構成されていることが特徴である。

北上川西岸に位置する中世末期の代表的な城館である柳田館跡（片寄）は、発掘調査が実施された城館である。空堀・土塁・柵列などの防衛的施設や掘立柱建物、竪穴遺構など、家臣屋敷跡とみられる遺構が複数検出されている。また船載品を含む陶磁器、金属製品などが出土し、当時の有力武士階層の生活の具体相を示している。東部地域の城館も規模の大小の違いはあるが、城郭の基本的な構成や出土内容はほぼ同様と考えられる。



長岡館跡主郭

**戦国期の東部地区** 戦国期になると、高水寺斯波氏は、同族である足利将軍家や大崎探題家の衰退によって存立基盤を失い、郡内の在地領主（重臣）に対する威信も失墜し、三戸南部氏（後の盛岡南部氏）に離反する者が多かった。天正 16 年（1588）、高水寺斯波氏は、北上川流域に南下政策を進める三戸南部氏によって滅ぼされた。天正 18 年（1590）の小田原合戦後、豊臣秀吉による東北地方の戦国大名の再編成を目的とした「奥羽仕置」が実施された。この仕置では、三戸城主南部信直は「南部内七郡」を領知する朱印状（安堵状）を秀吉から与えられ、斯波氏の旧領である東部地区を含む志波郡一円を南部領に組み入れた。

## (5) 東部地域の歴史（江戸時代）

**幕藩体制と志和郡** 近世初期、盛岡藩は花巻・遠野・三戸・花輪・八戸など、新領地の重要な城館に一門の重臣を城代として配置した。志和郡（近世は「志波」から「志和」に変更される）も重要な拠点として位置づけられ、郡山城代が置かれた。盛岡南部氏（旧三戸南部氏）は、高水寺城を郡山城と改め、盛岡城を普請する間、藩主の臨時的な居城になった。慶長年間（1596～1615）に奥州道中の宿駅となり、城下町・宿駅のほか、北上川舟運の河岸場としての

機能を加え、交易・交通・伝馬の要所として発展した。当時の日詰町には新田町・肴町・仲町・寺小路・習町・鍛冶町などがみえ、各町の出入り口には木戸が設けられた。また、代官所・御蔵・御用屋敷・村宿など藩の施設が置かれた。

盛岡藩・八戸藩では領内の郷村を統治するための代官統治地区を「通」と称し、各通に代官を配置した。志和郡では、八戸藩の成立によって旧郡山城代管轄区は、従前の8管轄区から郡山4代官区に再編された。4代官区とは、日詰通・徳田通・伝法寺通・長岡通をいう。

通制度は、享保20年（1735）頃に25通25代官所に統合・整理された。その後、志和郡の代官所は、盛岡藩管轄の33か村2新田と八戸藩管轄の7か村に固定され、それぞれ日詰通・長岡通・徳田通・伝法寺通・上田通・遠野通・八戸藩志和通の代官所管轄になった。東部地域は、長岡通・上田通（北沢村・栃内村・江柄村・紫野村）、遠野通（上佐比内村・下佐比内村）に区割りされていた。

**遠野南部氏による佐比内支配** 阿曾沼氏の旧領であった遠野地方は、仙台藩との境界であったことから、寛永4年（1627）、二代藩主南部利直はその境界警備の強化のため、南部一族である根城南部氏（八戸直栄）を八戸から遠野へ転封（領知替え）した。中世以来の名族であった根城南部氏は、遠野に転封後、「遠野南部氏」と呼ばれたが、領主は旧来の「八戸」を名乗った。なお、八戸藩の藩主家とは直接の関係はない。

遠野南部氏の所領は、遠野諸郷のほか、閉伊郡・岩手郡・志和郡・九戸郡・二戸郡の一部に及んだ。その後、盛岡藩から「八戸藩」が独立したため、その知行地（所領）の入替えがあった。

盛岡藩大迫代官区に属していた佐比内村は、この知行替えによって遠野南部氏（領主八戸弥六郎）の所領となった。延宝3年（1675）、佐比内村の一部が盛岡藩の直轄地として分割され、大迫代官所の管轄とった。このため佐比内村は、遠野南部氏の知行地である「上佐比内村」と盛岡藩直轄の「下佐比内村」に二分された。佐比内村は、遠野街道の要衝として馬継が整備され、遠野南部氏の代官所が設けられた。

遠野南部氏（八戸氏）は、盛岡南部氏と同様、甲斐源氏南部光行を始祖とする南部氏一族と伝えられ、その遠祖は前九年合戦で勝利した源頼義である。その家格から代々の遠野領主は、盛岡藩御三家（遠野南部家・中野家・北家）として盛岡城に常勤した。中野氏は、九戸氏の一族で、高水寺斯波氏の重臣であった。

**八戸藩の飛領地** 寛文4年（1664）、盛岡藩三代藩主南部重直は後継者を定めないうちに死去した。幕府は盛岡藩10万石のうち、弟重信に8万石を与えて盛岡藩を相続させ、弟直房に2万石を与えて新たに八戸藩を創設させた。この裁定によって志和郡の中に八戸藩の飛領地（飛地）が生まれた。

紫波町域では、上平沢・稲藤・土館（土館・金田・糠塚・山王海・砂小沢）・片寄（北片寄・南片寄）が八戸藩に編入された。八戸藩では、寛文11年（1671）、盛岡藩と同じように通制を導入して藩領を6代官区に区分し、地方行政を担当させた。志和代官所は、上平沢村の馬場に設置され、御仮屋と呼ばれた。



志和代官所跡地（上平沢）

八戸藩の成立によって、紫波町域では、盛岡藩・八戸藩による二つの藩政が展開された。さらに遠野南部氏は、盛岡藩では最大の知行地（領地）をもつ高知衆で、独立した藩のような地位と権限を与えられていたことから、三つの藩によ

って統治されたといえる。紫波町に多様な文化が混在している要因と言える。

**キリシタンと禁止令** キリシタン宗とは、キリスト教を排斥する立場から用いた言葉で、禁制以降は邪宗門じやしゅうもんと呼ばれた。キリシタン宗は、イエズス会（ヤソ会）、フランシスコ会などの会派の宗教である。

江戸幕府は、当初はキリスト教に対して弾圧と呼ぶような政策はとっていなかった。しかし、キリシタン宗門が幕府の支配体制に組み込まれることを拒否したことから、次第に態度を硬化させていった。

慶長 17 年（1612）、幕府は直轄領においてキリシタン宗門を禁じ、翌 18 年には直轄領に出していた禁教令を全国に広げた。また、京都南禅寺（臨済宗）の金地院崇伝こんちいんすうでんが起草した「伴天連追放之文」（バテレン追放令）を交付した。これらの一連の法令などが「キリスト教禁止令」（キリシタン禁制・禁令）と呼ばれる。

キリシタン宗を禁止した背景には、神父（バテレン）やキリシタン大名が神社仏閣を破壊させ、領民を強制的にキリシタンに改宗させるという実態があったからである。また、キリシタン宗の布教の裏には日本を軍事的に占領するという宗教的な意図もくろみ以外の目論見があったとされる。一時的にせよ、長崎の岬が教会領となり、要塞化されたことがある（ヴァリニャーノ『日本巡察記』東洋文庫）。幕府が布教を禁じたことは、当時としては当然の対応と考えられている。

**キリシタン領主後藤寿庵** 佐比内地区にはキリシタン墓碑が残されている。佐比内地区になぜキリシタン信者が多かったのだろうか。この背景には、他領から来る金山労働者の存在だけではなく、仙台藩士で水沢の地方領主であった後藤じゅあん寿庵の影響があるといわれている。

長崎でキリシタン信者になった後藤寿庵は、支倉常長はせくらつねながを通じて伊達政宗に仕え、見分村（奥州市水沢区福原）の領主として胆沢扇状地に灌漑水路を築き、水田地帯の開拓の祖として語り継がれている。

寿庵は熱心なキリシタン領主として、居館近くに天主堂・クルス場（キリシタン墓地）を建て、家臣や住民をキリシタンに帰依させるとともに、聖書の福音にちなんで見分の地を福原と改めたという。

幕府の禁教令によって、キリシタン信者の探索が強化されていくなか、京都・大坂のキリシタン信者が多数逮捕・投獄された。幕府から棄教を迫られてもそれを拒んだキリシタン信者 71 名が「奥州外浜そとがはまへ流罪」（「当代記」）することが決まった。この時期のキリシタン信者に対する罪科は「流罪」程度であったが、

元和 8 年（1622）、長崎でキリシタン信者が処刑された事件を契機に、江戸幕府は信者の発見と棄教（強制改宗）を積極的に推進し、弾圧を強化していった。イエズス会は東北地方の北端へ流刑されるキリシタン信者を救援するため、当時キリシタンを容認していた仙台藩に神父が大量に進出するようになった。

その後、幕府はキリシタンに寛容だった仙台藩に対し、監視を強化していった。幕府は伊達政宗にキリシタン信者の処断を迫り、政宗もそれを承服せざるを得なかった。政宗は寿庵に棄教するよう書簡で迫ったが寿庵は受難を避けて盛岡藩領あるいは秋田藩領ちようさんに逃散したと伝えられているが、詳細は不明である。

**盛岡藩のキリシタンの弾圧** 寛永 12 年（1635）に実施された盛岡藩の調査（花巻・盛岡・遠野・郡山の切支丹覚書 19 通）によれば、キリシタン信者は 176 人（男 107 人・女 69 人）を数える。一番多いのは百姓とその家族（82 人）である。侍・町人・職人がそれに続き、金堀りとその家統は 14 人で一番少ない。

信者の中には、指導者を後藤寿庵系統とする者が21人、その弟子系統とする者が80人弱を数え、盛岡藩領では後藤寿庵の存在や影響力が大きかったことを示している。

これらの信者のうち、90人が処刑されているが、郡山分は10人（子供3人）であった。処刑者のうち10歳以下の子供23人が含まれ、キリシタン弾圧の悲惨さを物語っている。

寛永14年（1637）の「島原・天草一揆」（島原・天草の乱）を機に、幕府は諸大名に対して禁教策の強化を命じるとともに、ポルトガル人を日本から追放し、「鎖国」が開始されることになる。

盛岡藩は、従来の方針を変えて藩領内の鉱山にも探索の手を伸ばすようになった。佐比内の朴木（厚朴）金山においても多数の信者が捕縛されたと伝えられている。また、幕府の禁教策の強化令を受けて、盛岡藩でも各所にキリシタン禁制の高札が掲げられた。キリスト教の信仰を禁じることはもちろん、伴天連をはじめ宗門関係者がいることを訴え出たものに対しては褒美を出すことを明示している。



キリシタン禁制高札（佐比内公民館）

**キリシタンの里** 金山が多い志和郡は盛岡藩領内でもキリシタン信者が多かった地方である。近世盛岡藩領では、100以上の金山が開発されたといわれている。東部地域の佐比内・赤沢・長岡地区は、盛岡藩では鹿角地方と並んで有数の産金地帯だった。佐比内地区には10か所以上の金山跡が知られている。岩手県域では、金山ではないが、「東北の島原」といわれる旧仙台藩領の大籠地区（一関市藤沢町）では、300人を超すキリシタン信者が殉死したと伝えられている。

佐比内にはその信仰の足跡であるキリシタン遺跡（墓）などが残されている。当時のキリシタンの家には仏壇や神棚が祀られ、表面上は仏教徒として振舞っていた。佐比内のキリシタン遺産は、教義を実践する伝道者が一人もいない中で、既存の社会や宗教と共生しながらひそかに信仰を守り続けた人々の極めて稀な信仰の形をモノで表現した遺産である。

キリシタン信仰が迫害を受けると、聖母マリアが仏教の観音菩薩と結びつけられるようになった。来迎寺には佐比内にあったとされるマリア観音像が祀られている。女性の姿をした観音を隠れみのに、マリア像と見立て、信仰を守ろうとした。信者だけではなく、安産や子育ての守り神として、既存の神や仏と同じように信仰の対象にしてきた。キリスト教のマリア崇拜が仏教の観音信仰や土着の民俗信仰と融合したものと見える。佐比内のキリシタン墓碑やマリア観音像などのキリシタン遺産は、県内のキリシタン信仰や弾圧の歴史を今に伝える数少ない宗教遺産である。



マリア観音像（日詰来迎寺）

（文責 大沼 信忠）